

---

# 風邪

高橋熱

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風邪

### 【Nコード】

N6195Q

### 【作者名】

高橋熱

### 【あらすじ】

めったに風邪をひかない夫が体調を崩して帰宅する。

「私」は夫のために寝食忘れて尽くすものの、夫にその気持ちは伝わらない。

結婚8年目、妻の「優しさ」に当然のように安住する夫。

会話のない食卓。浮気の影。

満たされぬ妻の切実な思いを、独白風に書いてみました。

さっきのあの言葉だけは、どうしても許せない。この一週間、どれほどあなたの体のことを最

優先に考え、尽くしてきたと思ってるのだろう。

あなたは帰宅するなり、ビタミンと消化に配慮したお弁当のことには一切触れず、真っ先に冷蔵庫を開けて、がっかりしたようにこう言ったのだ。

「ユンケル、買ってないんだ」

あなたは悪気なく言っただつてもりかもしれないけれど、私はこの時倒れないことが不思議なくらい体の力が抜け、キッチンで大根の葉を刻んでいたことなんて、遙か遠い昔の出来事のように霞んでいた。きっとその理由なんて、あなたには死ぬまで解りっこないだろう。

それから、あなたはトイレで用を足し、手を洗い、うがいをし、スウェットに着替えてから和室の布団にもぐりこんだ。いつもの流れと違うのは、お風呂に入ることと食事することが省略されていることだ。

湯に浸かると熱が余計に上がる気がすると言っし、シャワーではこの悪寒の中耐えられないと言う。私には単に「面倒臭いから」としか思えない。せめて下着くらいは替えて欲しいからスウェットの上にパンツとシャツを置いているのに、あなたはわざわざそれだけ隣に移して、スウェットだけを着る。

「どうせまた後で汗かくんだから」。

そしたら、また着替えればいい。下着なんていくらでもある。

なのに、あなたは私の気持ちなんて少しも気に留めようとせず、

マイペースで事を進める。病

人である間は何を言ってもいいし、何をしてもいい、と思っている。  
今掛けている布団も顔をう

ずめている枕も、今日たつぷりベランダの陽射しを浴びたから、柔  
らかくてふかふかなはずな

のに、あなたはそれに気付いているのかいないのか、もう寝息を立  
てていた。

風邪。

「寒気が酷い」と顔を真っ青にして帰ってきたのは、ちょうど先  
週末のことだった。熱を測っ

てみたら、三十八度五分。普段、めったに熱なんて出さない人なの  
に。耐え難い寒気。腰を中心

とした節々の痛み。唾液も飲み込めないほどの喉の腫れ。

十一月初旬。私はちよつと「インフルエンザ」を疑ったけれど、  
流行するにしてはやや早いし、

ニュースも新聞も近所からもそんな話は聞いていない。喉が痛い  
って、扁桃腺が腫れている

のかも。でも、もうこんなに遅い時間では、診てくれる医者はない。  
仮にインフルエンザとし

ても、発症して一定時間が過ぎなければ検査できないということ、  
雄介が毎年罹っているからよ

く分かっている。いずれにしても、今晚はぐっすり眠る以外にない。

「とにかく横になりたい」って、あなたはこの世の終わりみたい  
な顔をして言うから、私は油

の火を止め、急いで布団を敷く。そんなに調子悪かったなら、もっと前にメールくれればいいのに。

布団に入っても、あなたの体はまだぐくぐと震えている。家にある毛布の中で一番温かい毛布と、羽毛の掛け布団、その上にもう一枚かけてあげる必要があるそう。

「痛え、痛え」と呻き声。しゃべったら余計痛いと思うけれど。唾液を飲み込むたびに、針だらけの堅い金属の玉を無理やり飲まされているようだ、と。

どう見ても、まともな食事は無理そう。私は一通り揚げ物を揚げた後で、小さな鍋でおかゆを作ることにする。恐らく、一度眠ったら当分起きられないだろうから、先に食べさせた方がいい。ただ、おかゆを作り終えるまで意識が持つかどうか。

「明日、会社休まなければ駄目だよ？」

「この忙しい時期に休めないって。行くつもり」とあなたは布団の中から言う。

「そんな状態で仕事なんてできるわけじゃない。事故でもしたらどうするのよ」

あなたは飲料メーカーのルートセールス。お客さんに対して失礼だし、運転自体、危険。

「一晩眠れば治るよ。ただの風邪だって。ねえ、もっとあったかくしてよ。汗をたくさんかいて熱下げなくちゃ」

これでまだ布団をかけるっていうの？ これ以上かけたら重くて安眠できない。でもあんまりしつこくそう言うから、足元に薄めの毛布をかける。風が入り込ま

ないように、下半分は敷布団の下に折り込ませて。

扁桃腺からくる熱じゃ、いくら汗をかいてもなかなか下がらない、というのも雄介での経験則。

雄介は小さい時から病弱だから小児で罹る病気のほとんど全てを実践している。もちろん、小

学生にあがった今だって、今度は何の病気に罹るのかと、私はいつもびくびくしている。

あなたはめったに風邪をひかない。結婚以来、寝込むほどの風邪は数回程度。ここ二、三年で

は一度もひいていなかった。そういう時って、ひくときはまとめてひく。本人は絶対風邪なんて

ひかない、って思い込んでるからかなり無理をする。だから重症になりやすい。

おかゆが出来上がった頃には、あなたはやっぱり眠っていた。「パパ、どうしたの？」と、部

屋で宿題をしていた息子が襖を開けてあなたを見る。

ただでさえ体が大きい上に四枚布団を重ねているもんだから、和室にはちよつとした小山が聳

え立つ。頭が完全に布団の中に取り込まれているので、呼吸しているのかどうかも分からないし、

そこで眠っているのが間違いなく自分の夫であるという確証も抱けない。もしかしたら、本当

は夫じゃないのかもしれない。

「風邪ひいちゃったんだってさ」

「ええ、せっかく今日パパとDSやろうと思ってたのに」

雄介はとても残念そう。数日前に、新しいソフトを買ったばかりなのだ。

「今日はちよつと無理ね。また良くなつたらね」

「すぐに良くなる？」

「どうか。ママはお医者さんじゃないから。でも、風邪はいつか必ず治るもんよ」

すぐに良くなるわよ、つてどうして素直に言つてあげられなかったのか、自分でも不思議だった。ちよつといらいらしているのかも。

雄介にうつされたら二重の苦しみを味わうことになるので、当面違つ部屋に寝かせることにする。食事を済ませ、入浴を終え、雄介を寝かしつけてから、居間に戻る。

九時。

普通の夫婦なら、ここからが団欒の時間。子供が眠つた後、今日一日あったこと、感じたこと、見たこと聞いたこと、両親のこと、将来のこと、どんなことでもいいからたくさん語り合えるひととき。

私の家庭はそうじゃない。あなたの帰宅時間はばらばら。突然夕方、方に帰つてくることもあれば、午前様になることもある。私も、あなたの妻である以上、あなたのリズムには極力合わせなければならぬ。取り合えず週の予定を細かくカレンダーに書き込むけれど、その通りになんていって試しはない。仮に早く帰ってきたつて、別に子供の相手をするわけでもなく、家事を手伝つてくれるわけでもなく、話をするわけでもない。

家にいる間、あなたはほとんど眠っているつて印象。仮に起きていても、物を食べているか、

お酒を飲んでいるか、新聞を持ってトイレにこもっているかくらい。週に一度の休日だって、私  
が外に連れ出さない限り、あなたの方から「どこか行こう」なんて誘いは絶対ない。

雄介だって小学二年生。近所の子と同じように、公園でサッカーをしたりキャッチボールしたり、自転車に乗ってどこか遠いところまで行ってみたい、っていつも思っている。それなのにあなたは「休みなんだから、ゆっくりさせろ」と言わんばかりに、わざと遅くまで寝たふりをして、布団から出てこようとしない。何とか無理にお願いして、やっとやっと、本当に最後の最後で重い重い腰を上げる。そんなに嫌々遊んでもらってもちっとも楽しくなんてないだろう、って思うけれど、雄介の満足そうな顔を見ると、あなたにお願いせざるを得ない。だって、サッカーもキャッチボールも結局「ママじゃなくて、パパがいい」って言われるんだから。

忙しくて、疲れているのは分かる。でも、あなたはまだ三十二。今からそんな年寄りみたいなこと言っただうするの？

あなたはいつも疲れている。「別に疲れてないよ」なんて口では言っただって、全身に「だるさ」が漲っている。最近、いつもそんな感じ。

食事をしてたって、あなたからの話題なんて何も出てこない。私  
の話だって、上の空で聞いている。耳から入ってくる音のシグナルに対して、「うん、うん」と条件反射的に相槌を打って

るだけ。話の中身なんて、どうでもいい。不意について「今、何の話してた？」って聞いても、

「聞いてたよ」って答えるだけ。「じゃあ、何？」と言ったって、「聞いてたってば」の一点

張り。あなたは私の話なんてこれっぽっちも聞いてない。私の話も子供の話も、今のあなたにとつては何の価値もないつまらないものかもしれない。でも、私はあなたと会話がしたいからどんなテーマでも内容でもあなたには伝えているつもり。

あなたのいない間にこの家庭で起こったこと、学校での子供の様子、テストでいい点数をとって喜んで帰ってきたこと、あなたが聞いたら喜ぶだろうな、って思うことはなるべく話そうとしているのに。あなたはビールを飲みながら、無表情でただ頷いているだけ。たまにしゃべったかと思えば、九十六点のテストを見せた雄介に対して、「何でここ間違えた？」なんて。どうして九十六点を褒めてあげられないんだろう。そういうことは、疲れているとかいえないとかとは別次元の問題。

結婚生活も長くなればなるほど、毎日の感動もありがたみも次第に失われていく。元々はゼロであつた地点から、こつこつと二人で積み上げてきたものはずなのに、まるで最初から存在していたかのような、あることが当たり前のことのような感覚になる。結婚するってどういうことか、あなたを見ているとよく分からない。毎日でも一緒にいたいと思つたから結婚したはずなのに、今では毎日一緒にいることが苦痛としか思えない。むしろ、

離れていた頃の方が、私はあなたの愛情をたくさん感じていた。デートの時には、ちゃんと私

を見つめ、私の目を見て話をしてくれていた。

もちろん、正直なことばかりではなかったかもしれない。でも仮に嘘の言葉があったとしても、

私の目を見て言ってくれていたことに変わりはない。私と正面から向き合ってくれている、っ

という実感。

けれども、今は正反対。私の言葉を聞く気もないし、あなたの気持ちも伝えようとする意志も

ない。どれだけ長い間一緒に時間を過ごしていても、あなたはまるで私と違うことを考えている。

それが何か分からないから私はとても不安になる。

子供のことについてもそう。あなただって「子供が欲しい」というから産んだのに、「女の子」

じゃなかったからと言って、そこまで毛嫌いすることない。雄介に罪はない。「健康なら性別

はどっちでもいいよ」なんて、結局は嘘だったってこと。

あなたはいつも奇麗事ばかり。格好つけている。本心はいつも違うところにある。私はあなた

のどの言葉を信用していいのか分からない。

結婚して八年。「もう」と言えば「もう」だし、「まだ」と言えば「まだ」だし。年金がもら

えるような年齢になるまで、あと三十年以上。その頃には、当然雄介も結婚して家を出ていることだろう。

けれども、今のあなたを見ると、とてもあなたと二人だけで楽しく生活している様子なんて想像できない。子供がいなくなったら、それこそ本当に何の会話

もなくなつてしまいそう。

無言のまま、黙々と食事をする老夫婦。お互いいつも違うテレビを見て、時々気がついた方が  
ブランターに水をやる。夫のトイレの時間が長いことに妻は腹を立て、妻のカルチャーセンター  
での習い事に「お金の無駄」と夫は不貞腐り、お互いの妥協点を見  
い出せないまま、別々の布団  
で眠る。もちろん夫婦生活なんて遠い昔のスナップ写真。そんな将  
来の姿ばかりが頭に浮かぶ。  
少なくとも二人の未来の生活に笑顔はない。

突然、あなたは上半身を起こす。「熱い、熱い」と言つて、まるで悪霊でも振り払うかのように  
に四枚の布団を邪険にする。手で剥ぎ取り、足で蹴飛ばし。それからスウェットも下着も全部脱  
ぎ捨てて水で濡らしたフェイスタオルで首元や脇の下、股の間を矢  
鱈慌てて拭う。

そのうち、今度は「寒い、寒い」と言つて、畳んでおいた枕元の  
着替えを当然のように着る。  
そう、当然最初からそこにあつたかのように。あなたの着替えなん  
て私以外の誰が用意してくれ  
るというのだろう。

水筒の水。あなたは半分以上を一気にストローから吸い上げ、ふ  
らふらしながらトイレで用を  
足し、何も言わずにまた布団に入る。「おかゆ作つたけれど食べる  
？」と聞くと、「もう一眠り  
させて」とあなた。もう一眠りつて、一体何時まで眠るつもりなの  
だろう。もちろんあなたが次

に起きる時、それは何時になるか分からないけれど、当然私も起きなければならぬ。

ぐちゃぐちゃになった布団をもう一度敷き直す。一度、全部を取り去って一番下の毛布から。

あなたは敷布団の上で、いかにも寒そうに丸まっている。あなたは恨めしそうな目でちらと私の顔を見、そしてゆっくり目を瞑る。「こんなに寒さで震えている人間の布団を剥ぐなんてお前は鬼か？」とでも言わんばかりに。

どうしてそんな目をするのだろう。あなたが眠っていて寒くないようにと、裾から隙間風が入ってはいけないと思って掛け直してあげているのに。あなたのために思っていることなのにそれが上手く伝わらない。伝え方が下手なのだろうか。いや、それはあなたの気持ちの問題。今はあなたは、自分のことだけで精一杯。気持ちに余裕がなければ、相手の優しさを素直に受け入れることはできないし、元よりそれが優しさだなんて思わない。

脱ぎ捨てられた、あなたの衣服。シャツもパンツもたくさんの汗を吸ってぐっしょり。スウェットの首周りにまで汗染みができている。次の着替えを用意してから洗濯機を回す。汗に濡れた衣服を一晚放置しておくのは、私の性格が許さない。明日の天気は雨予報。いつから降り始めるのだろうか。

がたがた襖が揺れる音で目が覚める。どうやら深夜テレビを見たまま眠ってしまったみたい。下敷きになった腕が痺れて、しばらく感覚がない。

戸を開けると、あなたは既に着替え終わり、タオルで額を拭いている。髪の毛の水分だけはどうしても拭いきれず、不規則な塊となってぴょんぴょん跳ねている。血色はさつきよりいくらかいい

けれど、全体的に腫れぼったく瞼の皺も深い。

「どう？」と、恐る恐る私は聞く。

「一眠りしたら、大分楽になった」

そうは言うものの、口を開くのがひどく億劫そう。

「お腹空かない？　おかゆ食べる？」

「うん」

別に食べても食べなくてもどちらでもいい、という感じの「うん」だ。

「喉は？」

「痛い」

「食べられる？」

「仕方ないよ。腹は減ってるんだ」

重そうに体を起こして、あなたは鏡台の下の薬箱をがちゃがちゃ開ける。

「風邪薬って、ある？」

「ごめん、切らしてる。買ってこようか？」

「ううん、わざわざならいい。市販薬なんて、気休めにしかないから」

この間、私が飲んで終わっていた。ちょっとおかしいな、という時があったから。確かに市販薬って、ひき始めはいいけれど、ひいてしまっただけでは効き目ない。「気休め」なんて言うてるけれど、あれば飲みたかったに違いない。

あなたは食卓のいつもの定位置に座る。風邪をひいているあなたの体は、いつもより少しだけ

小さく思える。肩が落ち、背骨がお年寄りみたいに曲がっているせいかもしれない。年をとつたら、きつとお互いそれが普通の状態になる。

私は暖房を少し強め、パジャマの上に何か着るように勧めたけれど、「寒気は少し治まってるから」と言つて取り合わない。それは今少し眠つて体が温まっているから。どうせまた後で「寒い」って言い出すに決まってる。

胃を刺激しないよう、おかゆには何の味付けもしていない。塩辛いものが好きなあなたのことだから、いくら病人と言つても、これだけでは美味しくないだろう。後で塩とか醤油なんてふられる方がもつと嫌だから、小さな梅干を一つと、なめたけを少しだけいれてあげる。なめたけなんて本当は消化悪いのかもしれないけれど、塩気のあるものといえは今それしか見つからない。

あなたは湯気の立ち込めるれんげをゆっくりと口に運ぶ。特別、何の感想もなく。美味いとか不味いとかはともかく、熱いとかぬるいとかくらい言ったらどうなのだろう。

食事の時の男性のリアクションで、本当につまらない。「黙って食べているんだから、美味いってことだろ」なんて。別に評論家のようなコメントを求めているわけじゃない。美味しいなら「美味しい」と口に出して言つて欲しい、ただそれだけなのに。毎日同じものしか作っていないのなら感想なんていらぬ。でも、ない知識を振り絞つて、一応栄養バランスもそれなりに考

えて三度三度のメニューに頭を悩ませている主婦にとって、たったその一言がどれほどの救いになることか。それは料理に限ったことじゃない。洗濯でも、掃除でも同じ。毎日繰り返し行われる仕事であればあるほど、少しの感謝の気持ちって大事。

結局、あなたは終始無言のまま、あつという間におかゆを平らげる。こつちから感想を聞くのも癪だから別に聞かない。

しばらくあなたは最後の米を口の中でいつまでも噛み締めながら、ぼんやりと天井を眺めている。そういう表情をする時って何か考えているようにも見えるけれど、実際見た目ほど何も考えていないのは、長い間の付き合いの中で分かる。思案しているように何もしていない。あなたの頭の中は本当に真っ白なまま。

「あまり熱いのは、今の喉にはきついな」

これだけ間を空けて、出てきた言葉はそんな言葉。それなら、一口食べれば分かること。

致命傷にはならないけれど、いくつかの緊張の糸がぷつんと音を立てて切れた。お湯を沸かしていたけれど、私は火を止める。熱いのが駄目だと言われたら、お茶なんて飲めない。

私が席を立ったのを潮に、「また少し寒くなってきた」と言っただけ。夫は床に伏す。今度は自分で布団を掛け直し、居間とは反対の方向を向いて眠る姿勢をとる。

私は脱ぎっぱなしのスウェットと下着を洗濯籠へ。相変わらず、大量の汗を吸って重い。これだけの汗をかいたら、それ以上に補充をしないと体が脱水症状を起

こしてしまっ。

枕元の水筒。気付いたら空。ミネラルウォーターを入れあなたの頭の上に。一度熱を測ってもらいたかったけれど、もうすっかり眠りの体制だったので、いまさ声をかけるのも忍びないと思ひ、静かに襖を閉める。

午前2時。

かちん、こちんと、誰かの結婚式の二次会で当てたミツキの掛け時計の音だけが居間に響く。

真夜中の静寂をちゃんと聞いたことなんて最近なかったので、こんな音にも私は驚く。もっと

耳を澄ませば、冷蔵庫の通電音も聞こえるし、家具が軋んでいるのも分かる。上の住人が、何か物を落としたような音。犬の遠吠え。そして私のお腹の音。

そつえば、あなたの世話に気をとられて、ほとんど食べ物を口にしていなかった。でも夜中

に物を食べると太ると言うし。今更食事なんて余計に胃がもたれるだけ。食卓のみかんを一つ頬張る。

少し眠ったせいか、目がらんらんとしていてすぐには眠れそうもない。テレビの音をミュートにしたまま、NHKから順番にチャンネルを回す。別に見たい番組なんてない。掛け時計の振り

子以外、部屋の中で何の動きもないのが寂しいだけ。テレビはいい音なんてなくても、ただ流

しているだけで賑やかな動きがある。出演者が笑う。観客も笑う。もちろん、録画だっていうこ

とは分かっている。でもこんな真夜中にこれほど大口を開けて笑っている人々を見ることのでき

る国って、とても幸せな国なのだと思う。

あなたの酄。ちよつと襖を開けて覗く。さつきと同じ格好のまま、酄だけかいている。

喉を見てもらうのなら、内科より耳鼻科が妥当。私は引き出しを開けてがさごそとあなたの診察券を探す。券はすぐに見つかる。耳鼻科は花粉症の注射を打ちにいつているから、時々使う。

朝八時半から受付開始。ここの耳鼻科は混むけれど、丁寧にみるから評判いい。でもそんなに早起きはできないだろう。私が先に起きて、受付だけ済ましてくるようかもしれない。もちろん、子供を見届けてからの話。というか、私自身が朝起きれるのかどうか。やっぱり、ぼちぼち床に入った方がいい。私まで参ってしまったら、この家、どうにもならない。私以外に、ご飯を炊く人もいなければ、お風呂を入れる人もいない。あなたや雄介が風邪をひくことはできても、私が風邪をひくわけにはいかない。たったの一日だって。

翌日のあなたは、あまりに多くの汗をかいたせいか虚脱している。唇は乾燥し、頬も幾分こけたように見える。病院に行かせるのも一苦労。「具合がいいから仕事に行く」なんて言い出す始末。一晩眠って起きた時は、誰だって楽になっているもの。それでも、まだ熱は三十七度五分。夫は元々耳鼻科嫌い。「細い針金を鼻から入れられるのと、喉の奥に塗る消毒液が大嫌い」なんて、雄介みたいなこと言ってる。

私はすぐにでも病院に向かいたかったが、「こんなめちゃくちや

な髪型じゃ」とあなたはシヤワーを浴びに浴室へ。こんな非常事態に格好なんてつけなくていい。町にくり出すわけじゃないのに。

お湯が床板にぼつぼつ落ちる音を聞きながら、新聞の折込チラシを眺める。家電製品の安売りをうたうゴシック系の巨大数字が両面に渡って踊る。畳一畳分はありそうな大きなチラシ。どんなにチラシが大きくても、私たちの家庭には今電化製品を買う余裕はない。テレビも冷蔵庫も洗濯機も乾燥機もビデオカメラもドライヤーも皆結婚したときに揃えたもの。できることなら、これらの全てを買い換えたい。別に何かが壊れたわけじゃないけれど、今は機能もデザインもいいものがたくさん出ている。

パソコンだけは、あなたが随時手を加えているので、常にいい状態のようだけれど、私には知識がないから分からない。そんなに性能ばかり良くして、どうしたいのだろう。パーツ代といつても馬鹿にならない。それなら普通に市販されているパソコンが一台買えてしまうんじゃないか、と思っても、夫は「そうじゃないんだ」と言う。それに「このマンシヨンの回線スピードは恐ろしく重い」ということもよく言うけれど、私がインターネットをしている分には何の不自由も感じない。

「男から趣味を取り上げてはいけない」と世間は言う。だから、お金を請求される度にしぶし

ぶ渡してはいるが、このところかなりエスカレートしてきている。私の理解できないことにお

金を使うと言うのは、日々いいものを少しでも安く買おうと頭を痛めている私にとってはとても

辛い。五円でも安いものをわざわざ選んで買っている自分が空しくなる。

でも結局、お給料はあなたが働いて稼いだお金。「俺の金だ」と主張されれば、私も雄介も何も言えない。

だから、私は今まで無条件にお金を渡してきたけれど、そろそろ限界。貯金が全くできてない。

これから雄介が大きくなって、塾に通ったり、私立を受験したりなんてことになったら大変。

今の状態じゃ、とても行かせてやれない。あなたはいくらでもこの家にお金があると思っている。

私がつまくりして、将来への貯蓄も手堅くできている、と。

今は逆に貯金を食い潰しているという事実をあなたは知らないし、知ったところで、それは私

のやりくりが下手だからだ、と非難されるのが落ち。あなたの給料、この五年間ほとんど上がった

ていない。ボーナスが下がっていることと、保険料が上がっているせいで、むしろ手取りは落ちている。そういうこと、分かっているのだろうか。

正直、風邪なんてひいて欲しくない。医者にかかれば、診察料と薬代がかかる。医療費も上が

っている。行かないで治せるものならそうして欲しい。でもこじらせてもつと重くなってしまっ

たら、余計に負担が大きくなる。喉が痛ければ物が食べられない。ものが食べられないと抵抗力

がつかないからなかなか治癒しない。

「会社からの風当たりが強い」と、あなたは最近よく言う。長期で休んでしまったら、ますます居心地が悪くなる。「健康は自己管理」と言っけれど、妻としての責任もある。「ろくな食事をさせてないんじゃないか」と思われるのは心外。ただでさえ、雄介が病弱なのは私のせいだと、あなたの両親には思われているんだから。

予測通り、医師の診断は「扁桃炎」だった。扁桃腺が左右両方とも大きく腫れ、膿が溜まっていた。処方された薬は抗生物質とうがい薬を含めて五種類、五日分。とにかく痛みを抑えなくてはどうにもならないので、自宅に戻ってからすぐにうがい薬でうがいをさせ、抗生物質を飲ませる。今月の疲れがまとまって出たのかもしれない。特に残業の多い月だったから。残業が多いといっても、ほとんどお金ではもらえないけれど。

あなたは薬を飲み終えると、直ぐ着替えて横になる。シャワーを浴びるだけでも意外とエネルギーを使うのかも。解熱剤を飲んだから、きっと熱は落ち着いてくるだろう。扁桃腺の腫れも治まってくれば、おかゆじゃなくてちゃんとしたものが食べられる。枕元に着替えを置き、水筒の水を新しいものに入れ替えて、寝息を確認してから襖を閉める。お風呂のお湯を移しかえ、洗濯機を回す。今日も外は冷たく曇っている。昨夜干した洗濯はほとんど乾いていない。冷やされた分、余計に濡れた感じ。洗濯ハン

ガーをはずして室内に戻す。  
加湿器がないから、こうして室内に置いておけば加湿器替わりになる。喉に乾燥は大敵。今洗っている洗濯物、もう干すハンガーがない。そんなことに頭を悩ませている自分がとても小さな人間に思えて情けなくなる。洗濯が終わるまで三十分。終わってから考えよう。

昨晚、あなたが帰宅してから今まで、報われぬ気遣いと不規則な睡眠で私自身も少し疲れている。あなたは疲れたら会社を休めばいい。私が疲れても、家事を休むわけにはいかない。雄介は二時を過ぎれば帰ってくる。その前にあなたの昼食の準備と、夕食の買出し。食事の時間は決まってやってくる。同じものを出すわけにもいけないので、手を変え品を変え、腐らせて捨てるなんて無駄がないよう、冷蔵庫の細かいところまで注意を払う。

時々、死にたいくらい鬱になる。何もかも放り投げることができたら、どんなに楽になるだろう。と。家事も育児も、夫からも逃げ出すことができれば。襖の向こうにあなたの気配を感じながら、私もソファに横になる。物干し竿に見慣れない白い鳥が止まり、私と目が合うと、すぐに飛び立っていく。

これまでの結婚生活について考える。あなたと付き合い始めてから、結婚式、そして雄介が生まれ、昨日までのこと。映画の回想シーンのように、その時々の子がワンカットずつめくられる。この間に、私の何が変わり、何が成長したのだろう。自分が

求めていた「幸福」はその一部でも手に入れられたのだろうか。私の選択は間違っていなかったのだろうか。

考え始めると、決まって私は落ち込む。だから普段はなるべく考えないようにしているけれど、ふと気の抜けた瞬間、時間をもてあました時、「後悔」と「失望」の大蛇が、私を丸呑みにしようとする。身長150センチ足らず、体重も40そこそここのちっぽけな私なんて、きつと簡単に飲み込める。

後悔。あなたと結婚したこと？ 雄介を産んだこと？

それは後悔とは思ってない。少なくとも結婚する時、あなたを愛しているから結婚するんだ、と思っていた。一生一緒にいたいと思ったから、あなたとの結婚を考えた。そして雄介が生まれた。あなたがいなかったら、雄介は今この世にはいない。それを考えると、私の選択が間違っていた、とは思えない。

なのに、この虚しさは何だろう。けだるさは何だろう。頭の中にある、いつまでもすっきりしない、この靄の正体って。

幸福な人がこんな感覚持つだろうか。死にたい、とか、逃げ出したい、とか。幸福から逃げ出す人なんているだろうか。ありえない。

手の肌荒れ。顔の皺。白髪の量。一年間のセックスの回数。あなたの年収。雄介の学力。上の

階に住む住人の配慮の無さ。擦り切れた下着。物価の上昇。政府の無策。このところ、私を絶望的にがっかりさせたもの。

最近の私は落胆ばかり。心の底から笑ったことなんてあったらうか。笑いと言ったって、自分の情けなさ、みじめさを自分で嘲笑することだけ。「幸せ」から「不幸せ」を感じるようになった潮目は一体いつだった？　もしかしたら、初めから「幸せ」なんて時期、なかったのかもしれないけれど。

こんなにいろいろなことを考えている私のことなんて気にもせず、あなたは深い眠りににつき、体中を駆け巡る風邪の菌と格闘している。私も、風邪の菌ではないけれど格闘している。風邪はいつか決着がつくけれど、私の格闘は、いつ解決するのか分からない。だって、何と格闘しているのか分からないのだから。

あなたはいつ目覚めるか分からない。でもきつと、お腹が空いているはず。私は温かい鍋焼きうどんを作るため、小さな土鍋にだし昆布を入れ、水を張る。私はあなたと雄介のためにいつも働いている。私の体は自分のためじゃなく、夫と息子のためにある。結婚生活。家族。これが私の選んだ道。

それから一週間、私はあなたの風邪を早く治すことだけを考えた。医者薬を飲み始めると、熱はたちまち低い体温で安定し、喉の痛みも治まっていった。喉に痛みを感じなくなったあなたは食事量は少しずつ増えていったが、今度は「口内炎」が舌先を中

心に口の中全体に広がり、間もなく食事の時間がまた苦痛になった。熱いものも、しょっぱいものも駄目だった。

熱がひいたので、あなたは再び仕事に復帰した。いくら薬で症状が和らいでいるとはいえ、風邪が完全に治ったわけではない。もう少し様子を見た方が、って私は言っただけで、これ以上休むわけにはいかないから、とあなたは頑として耳を貸そうとしない。「せめてマスクをしてって」と言っても、咳もくしゃみも出てないし、マスクをした営業なんかとお客さんは話をしたくない、とけんもほろろ。咳やくしゃみが出てないからマスクをするんじゃないで、まだ抵抗力のない体が「他の菌」を背負い込まないようにするためのマスクなのに。

それから毎晩、帰宅時に「調子はどうだった？」と聞くけれど、あなたの答えは「もう大丈夫だよ。治ったよ」と、ただそれだけ。薬は五日分だから、水曜日に切れたはず。でもあなたはそれから熱を測ろうとはしないし、どうしても見たいテレビがあるといって、夜中遅くまで起きていたりする。今まで薬のお陰で抑えられていた、ということが本当に分かっていないみたい。週末にかけて、あなたの調子がまた少しずつおかしくなってきた。目に充血し、顔も不自然に紅潮している。少し咳も出始めているよう。栄養のつくものを、  
と思って料理をしても、あなたは口内炎を理由にほとんど手をつけ

ない。味付けも薄めにして、冷ましてから並べているのに。

一週間がこんなに長く感じたことは最近なかった、とあなた。その言葉が全てを物語っている。

あなた、全然良くなってる。めったにひかない風邪をひいた時くらい、もっと休んでもいい。

これまで全然休みもとらずに頑張ってきたのだから。そのくらい会社に認めてもらえないの、と言つても「お前は社会に出て働いたことがない、組織と

いうものを全く分かっていない」なんて。

確かに私には社会経験はない。でも体を壊してまでしなければいけない仕事って何だろう。それ

ほど価値のある仕事なのだろうか。あなたじゃなければ決してできない仕事なのだろうか。仮

にあなたの仕事がそういうものであったとして、その報酬があお給料だと思うとがっかり。

あなたの健康の値段イコールあお給料。おかしい。そんな会社も、そこまでしなければ維持で

きない社会も、どこか間違ってる。そのうち、世の中全ての人が体を壊して病人になる。病人の

売る商品。病人の売るサービス。病人が治療し、病人同士で癒し癒されて。病人が教育を行い、

病人を育てる。病人が子を生み、病人のまま死ぬ。恐ろしい社会。悲しい人生。

そして、あの一言。

確かに、あなたはそんなものを買っておいてほしいと言い残して出て行ったかもしれない。

私だって、あなたの話を聞き漏らすこともある。もしかしたら、意識的に聞かなかったかもしれない。だって、そんなもの買いたくないから。

私がこの一週間どれほど頭を悩ませて食事のメニューを検討し、汗をかいたと言えは着替えを用意し、喉が渴いたと言えはコンビニに水を買いに走ったというのだろう。天気の良い日には必ずあなたの布団を干し、部屋には掃除機をかけ、洗濯機も一日何度も回した。風邪を治す環境だけは良くしてあげようと、できる限りのことをしてきたのに、あなたは私の料理より、「コンケル」を選んだ。

別に滋養強壮剤がいけないということ言っているんじゃない。今までの私の努力に対して「ありがとう」の一言もなく「コンケル」を買い忘れたことを非難するその態度が、私にはどうしても許せない。許せないといったって、別にあなたと喧嘩するわけでもなく、家を出て行くわけでもないけれど。あなたはともかく、雄介を残して出て行くわけにはいかない。

結局、我慢しなければいけないのは、私。あなたは家を飛び出すことはできても、私はできない。あなたは仕事で家を離れることができても、私はできない。「家を守る」なんて奇麗事じゃない。家にいなくてはいけないから、家にいるだけだ。いなくていいものなら、とつくにいらなくなっている。

私は缶ビールをグラスに空け、一息に飲み込む。実際にはビールじゃない。ビールなんて高級品、毎日買えない。雑酒って言われるもの。ビール風飲み物。食道を伝って、胃袋まで流れ込んでいく様子がリアルタイムで分かる。こんな飲み方普段絶対しない。お腹を壊してしまう。そ

れでも、空いたグラスにもう一杯注ぎ、口をつけずに泡が消えていくのを黙って見ている。

何を考えている？

何も考えていない。

頭を真っ白にすることだけを考えている、といえは考えている。ぎゅっと閉じていた目を開

ける。目の前に、糸くずのようなものが右から左に移動する。一旦、目を閉じてから再び開ける。

また同じように糸くずが現れ、目を追う方向に移動してやがて視界から消えていく。

飛蚊症？

ここ一ヶ月くらい、気にしだすといつも視界に入っている。誰にも言っていないから、あなた

も知るわけがない。きっとこういうことまで含めると、夫婦であっても、お互いの知らないこと

なんて山ほどあるのだろう。年齢を重ねる毎に、夫婦だからこそ言えない事、言わない方がいい

ことが増えていく。でも夫婦で言えないことは、誰に聞いてもらいたらしい？

頭がくらくらしている。もうアルコールが回ってきているみたい。私は布団に横たわる。隣に

はあなたが眠っている。長い睫毛。堅い髭。半分口を開けて、口か

ら寝息を立てている。左手からこぼれ落ちた携帯。着信を知らせるイルミが点滅している。

腕枕をしたまま、私は静かに目を閉じる。何も考えるな。何も感じるな。そして、静かに目を開ける。たった数秒のことだけど、私の中に何かが宿り、私を困惑させる。頑なに守り続けてきた大事なものがいつの間にか脆く崩れ始めている。不信が疑惑となるのに、それほど時間はかからなかった。

私はあなたの携帯を開き、ボタンを押す。数年前まで、背景の画像は必ず家族の写真だったのに、今では自作のパソコンの写真に変わっている。

受信箱に、新着メールが一通。私はためらいもなく、もう一度ボタンを押す。あなたの携帯を覗き見るなんて、この時が初めて。夫婦であってもそれだけではないようにしよう、って決めていたのに。

あなたは何も知らずに深く眠っている。私はどんどん大胆になる。そんなにビールが利いてしまったのだろうか。半分自棄になっているのかも。私が自棄になったところで、大したことはないけれど。所詮、酔っ払って、夫の携帯を覗く事くらいしかできない、小さな女。

送信者： you-moonlight | 1972@xxx.ne.jp

件名： Re：

本文： 体の調子はいかが？ 次はいつ会えそう？

あなたの体を気遣ってくれるような女性、いるんだ。次に会うって何？

ゆう、むーんらいと。

あなたはあまりにも無防備。シークレット機能があるのかどうか知らないけれど。自分の妻は絶対に携帯チェックをしない、って確信でもあった？

私の知らないところで、何かが進んでいる。私も雄介も知らない、秘密の事。

もしかしたら、ただ私の勘違いなのかもしれない。仕事の相手かもしれないし、同級生かもしれないし、間違いメールなのかもしれない。けれど、私は深く考えない。どこかの浮気相手からのメールだと、勝手に決め付ける。そう、これは浮気相手。しかもこんな時間に、家族と一緒にいることが分かっていながら、正々堂々送りつけてくる確信犯。私への宣戦布告。

夜遅く帰ってくる大半は、この女に会っているから？ 残業代をいつもつけられるわけじゃない、ということもこれで納得がいく。パソコンのパーツを買っていつて家計からお金を持っていけば分らない話。そういうこと？

受信履歴を覗いたけれど、そのメール以外、何も残っていない。送信履歴も全てクリアされている。万が一に備えて、ちゃんとその都度消しているのだ。でも残念。風邪による睡魔には叶わなかったのね。その万が一に、ついに今日当たってしまったってこと。

私は返信を書き込み、送信ボタンを押す。それは自分から出てきた言葉とは思えないほど直截的で、幼稚だった。送った後にすぐに中止を押したけれど、間に合わない。私は「送信履歴」

から、今送ったばかりの陳腐なメールを削除する。自分がすごく嫌になる。馬鹿馬鹿しくて仕方

ない。「死んじゃえ」なんてメール、最悪。もうどうにでもなつて私は服を着たまま横になっている。携帯は元々そこにあった時と同じ状態で丁寧に置いておく。

どんな返信がくるのかと心臓がもの凄い勢いで高鳴っている。

五分。

十分。

十五分。

反応はない。少し気持ちが落ち着いてくる。あんなことしなければ良かったと後悔。悪夢。あ

なたの携帯からは消去できても、相手の携帯には、私の「貧しい心」がちゃんと残されている。

それを思つと暗澹とした気持ちになる。

三十センチの溝。

あなたと私の布団の間には、三十センチの隙間が空いている。意識的に開けているわけではな

いけれど、結婚以来、この溝の幅は少しずつ開いてきている気がする。昔はもっとぴったりとく

つつけてあったはず。いや、のりしろのように、重なりある部分さえあったはず。

このペースだと、あと数年も経てば私の布団は押入れの襖まで到

達することになりそう。あなたとの距離がだんだん遠くなる。どこまで遠くなっていくのだろう。完全に背中合わせになってしまっても、そこから動き出さなければ、まだ方向転換するチャンスはある。しかし、どちらかが一歩でも前に動き出してしまったら、二人の距離は、それ以上近づくことはない。ぐるっと地球を一周して元の地点に戻ってくるまで待っていれば、それでもまだ最後のチャンスはある。けれど、そんなのいつになるか分からない。歩み出した方は途中で行き倒れ、待つ方も待ちくたびれて石になる。やっぱり動き出してしまったら、取り返しがつかないと思っていた方がよさそう。

この一週間の私の気持ちなんて何も知らないで、暢気に風邪をぶり返しているあなたが憎い。いや、一週間だけの話じゃない。結婚してからずっと。いや、もっと遡れば、あなたと出会って交際を始めてからずっとずっと、私はあなたのことだけを見て生きてきた。二十代前半から、ずっとあなただけだった。何があってもあなたのことを最優先に考えた。あなたとなら一生幸せでいられる、そう信じて。それなのに、あなたは、結婚し、雄介が生まれてから、変わってしまった。優しい言葉も態度も、何一つなくなった。私はただの女中になった。雄介なんて、あなたの平和な日常を脅かす厄介者の存在でしかない。

そして、携帯メールの女。  
気持ちが大きく揺れている。プラスとマイナス。陰と陽。自分で

も良く分からない。本格的に酔ってきたのかもしれない。気持ちのコントロール、利いてない。死んでしまえばいい。あなたも、女も。二人でどこかで死んでき

て。  
無防備に眠っているあなたの首。

いくら握力の弱い私でも、今この状態で、後ろから両手で押さえつけて全体重をかければ、あなたの息の根を止めることはできそう。あなたがいなくなってくれさえしたら、私は長い長い呪縛から解放される。

「あなたしかいない」という呪縛。

「あなたとしか幸せにはなれない」という呪縛。

「あなたしか愛してはいけない」という呪縛。

それがなくなった時、私には新しい可能性が、チャンスが訪れる。雄介と二人、その可能性を

求めて気分一新、新鮮な空気を吸い込むことができる。

涙が止まらない。次から次へと頬を伝って流れ落ち、両方の耳たぶをくすぐる。あなたの死を

本気で願った瞬間。自分が自分でないみたい。でも、これも本当の自分の姿。

あなたの寝息。あなたの寝返り。あなたの寝言。何て言ったのかは聞き取れない。きっと女の

夢でも見ているのだろう。あなたの妻が、すぐ隣で大泣きしながら、あなたの首を絞めよう、なんて思っているとは露知らず。

「ママ、ご飯炊けてる？」

私に声をかけているのは雄介だ。時計を見る。八時半。雄介はも

う自分で着替えを終えて、昨

夜の涙が干からびた私の頬を軽く叩く。

「ごめん、寝坊しちゃったね。今すぐ用意するからね」

一人で起きて、一人でお着替えなんてできるんだ、この子。知らない間に子供は成長している。

後ろ前になっているトレーナーを直してあげながら、私は褒め言葉と寝坊の詫びを言う。子供

に比べて、私は何をやっているんだろう。成長はおそか、退化すらしている。

あなたは体をベランダ側にねじりながら、まだ横になっている。

一応置いておいた着替えには

手をつけていない。枕元の水筒も、昨夜の水がそっくりそのまま残されている。一度も目が覚め

なかったのだろうか。こちらからだ表情が分からない。もっとも、顔なんてあまり見たくない

けれど。それにしても、食事もしないで、良く眠っている。

それから私は雄介に目玉焼きを焼き、玉葱の味噌汁を作る。胃のむかつきが抑えきれず、胃薬

を飲む。胃に不快感を覚えるたびに私は癖みたいに薬を飲む。最近あまり薬の利きも良くない。

飲みつけると効かなくなると言うけれど、本当。結局一時間くらい待っても、堅い棒でぐりぐり

やられているような痛みが消えることはない。

雄介に勉強をさせている間に、私は洗濯をし、掃除機を和室以外かけ、換気扇のフィルターを

交換する。浴槽を洗い、ワイシャツにアイロンをかけ、観葉植物とプランターのハーブに水を

やり、返却期限の切れた図書館の本を整理する。そんなことをして

いたら、午前中があつという  
間に過ぎ去っていた。

けれども、あなたは起きてくることなく、いつまでも布団にいる。  
もうさすがに午後一時。け

れども昨日の夜から姿勢が全く変化していない。どうしたのだろう。

私はそつと布団をずらす。あなたは片手で顔を隠すように体を  
丸めている。寝息も聞こえてな

い気がする。私は耳をあなたの口元に近付ける。L時型に曲げられ  
た左腕が、うまい具合にあな  
たの鼻と口を覆い隠していて、呼吸音のチェックを妨げる。

額に、荒れ果てたがさが私の手を置く。温かいつもりでい  
たから、一瞬その冷たさにびっ

くりする。布団の中で眠っているのに、この冷たい感じは何なんだ  
ろう。汗をかいた様子もない。  
上半分しか見えていないけれど、肌の色も白っぽくなっている感じ  
がする。

眠っているあなたの肩を、少しだけ揺する。広い肩。硬い筋肉。  
あなたは微動だにしない。私  
はもう少し強く揺すってみる。あなたの体が左右に振れる。それで  
も、あなたは覚醒しない。

腕をどけて、頬を指先で叩く。自分ではかなり強めに叩いている  
つもりだけれど、あなたの皮  
膚は強張り、弾力を失っている。

嘘でしょ？

この時の私、一体どれだけ動揺していただろう。

外は快晴だというのに、さっき出した洗濯物を取り込んでカーテ  
ンレールに引っ掛けた。雄介  
が珍しく夢中で計算ドリルをしているのに無理やり止めさせて、D  
Sのゲームをやりなさい、だ

なんて。

それから、冷蔵庫の中の賞味期限が切れたものや、切れかけのものを片っ端からシンクの網の中に捨てた。意識的にあなたの方を見ないようにして。

寒くもないのに、体が震えている。目の前に冷たい水がじゃんじやん流れているのに、喉の渴きを癒す気になれない。こうしている間に、あなたが物音に気付いて起きてきてくれたら、って。

私、一人うろたえている。本当なら、とつくに救急車を呼ばなくてはいけないのかもしれない。

もっとあなたの様子を観察しなくてはいけないのかもしれない。

昨日、あれほどあなたの死を願ったはずなのに。もっと喜んでいはずなのに。喜ぶどころか、

今の私、とても孤独で寂しくて、恐怖心さえ湧いている。

雄介。生活。死別。未亡人。

私はあなたの枕元に駆け寄る。強引にあなたの手を取り、両手でぎゅっと握り締める。温かい。

かつて私の顔や体を幾度も包み込んでくれたその大きな掌には、昔感じたのままの熱がしつか

りと保たれている。手を握ったとたん、それがスイッチだったみたいに、私の瞳から涙が流れ始める。

私、また泣いてる。昨日も泣いて、今日も泣いて。きっと瞼、そのままじゃ買い物にも行けないくらい腫れてるだろう。でも仕方ない。涙だけは、こらえてもこらえても、自分の意志では止められないのだから。

ん。

あなたは不意に力を込めて握り返す。指の付け根が痛い。そんなにいきなり力を入れなくてもいい。心臓が不正脈を打つのが分かる。

「こんなに眠ったの、いつ以来だろう。目が痛い」

そう言っただけから手をどけて、あなたはこれ以上ないくらい、上下に伸びをする。気でもふれたかと思うくらい、大きな口を開けて変な声であくびをして。

地獄からの生還。良かった。生きててくれて。

「調子はどう？」

今度は挨拶代わりなんかじゃなくて、心の底から本気で尋ねる。

「心配性だな。大丈夫だって」とあなたは少し笑って答える。「

どうした？ 目、真っ赤だよ？」

「ううん、大丈夫」誰が見たって、「今泣いた目」に決まってる。

「腹減ったな。何かある？」

「うん、今、ご飯の支度する」

「あ、ちよつと」と言っただけ、あなたは腰を上げかけた私の手をとる。目を見られたくなかった

ので顔を合わせないようにしていたけれど、あなたがいつまでも見ているもんだから、私も仕方なく振り返る。こうして正面から見つめあうのなんて、すごく久しぶりな気がする。寝過ぎたあ

なたの顔、少し腫れぼったい。けれどその顔、二十代の頃と全く変わってない。男性の顔は年をとらないから、うらやましい。

「ありがと、由美」

そういうと、あなたは照れ隠しのようにさっと立ち上がり、トイレの戸を開ける。私は足に力

が入らず、しばらくその場所にへたり込む。

ありがと、由美。

感謝、そして私の名前。胸がぎゅんと熱くなる。電気の塵みtainなもの、体のあちこちにかすかな刺激をちりばめる。一瞬、激しく全身が硬直し、やがて少しずつ弛緩していく。昨日までの自分。そして、これからの自分。

何かが解決されたのかと問われれば、何も解決していないのかもしれない。でも、昨日の私と今の私、何か劇的に違っている気がする。プレーヤーのいない間違い探し。

私はこれからあなたのために朝食を作らなくてはいけない。高タンパク、低カロリー、ビタミンCが十分摂取できるバランスのとれた献立。サプリメントや滋養強壮剤には決して負けない、私の人生全てが詰まった食事。

あなたが風邪をひかなければ。もし、あなたが今風邪をひかなかつたとしたら、私は???。

<了>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6195q/>

---

風邪

2011年2月13日18時40分発行